

都道府県・指定都市番号	43	都道府県・指定都市名	熊本県	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科名	家庭（共通教科）
研究課題	生涯を見通して主体的に生活上の課題を解決し，家庭や地域の生活を創造する能力を育成するための学習・指導方法及び評価方法の研究				
ふりがな 学校名（生徒数）	くまもとけんりつだいにこうとうがっこう 熊本県立第二高等学校（1,222 人）				
所在地（電話番号）	熊本県熊本市東区東町 3 丁目 1 3 番 1 号（096-368-4125）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	https://www.kumamotodainihs.net/				
研究のキーワード	I C E モデル視点のチェックリスト，思考を意識した実習計画表，8 段階の自立度チェック，形成的評価，e ラーニング				
研究結果のポイント	<p>○自立度チェックの事前取組などが，先を見通せる学習に大きく役立った。</p> <p>○I C E モデル視点のチェックリストの書式を，家庭科だけでなく総合的な学習の時間や行事でも活用でき，理解を深める足場かけとなった。</p> <p>○授業改善の取組を P D C A サイクルとして図示し，学校内で共有することができた。</p> <p>○シングルポイントルーブリックを活用した授業は，ホームプロジェクトに取り組む際に，生徒が問題を見出したり，課題を設定したりするなど課題解決の過程の質の向上につなげることができた。</p> <p>○過去の生徒作品を参考例として提示することは，生徒が具体的なイメージを浮かべたり，作業効率を考えたりする点で有効であった。</p> <p>○振り返りの時間を充実させることで，知識の整理・定着に役立った。</p> <p>○e ラーニング事前課題をクイズ形式にすることで，投稿数を増やすことができた。</p> <p>○実習後に振り返りの時間を設け，実習計画表について改めて見直すことで，知識・技術の定着だけでなく，思考を一層深めることができた。</p> <p>○防災ずきん作成や A L T 協力の調理実習は，防災や多文化理解など実践的・体験的な学習の素材として有効だった。</p> <p>○大学の先生方から専門性の高い知識を得ることで，生徒の興味を高めることができた。</p>				

1 研究主題等

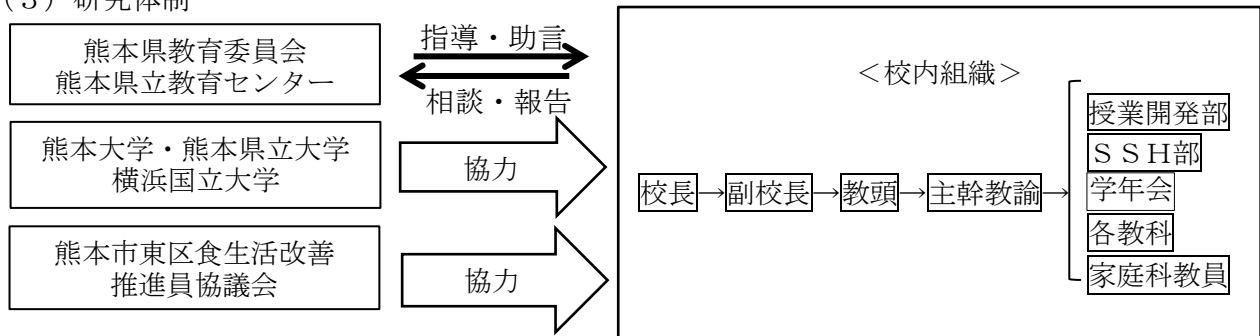
(1) 研究主題

科目「家庭基礎」における，深い学びをもたらす指導方法等の研究
～実践的・体験的な学習活動の工夫～

(2) 研究主題設定の理由

本校では，これまでインストラクショナルデザインの視点を背景として，生徒の学習意欲の喚起，向上につなげるために学習活動を工夫するなど指導の改善・充実を図ってきた。これまでの 2 年間の研究では，平成 28 年熊本地震の影響により，実習施設等が通常のように使用できない状況であった。しかし，そのような特別な環境のもとでも工夫を積み重ねることで，実践的・体験的な学習活動を工夫し，学習内容の定着を図る上で，その重要性を確認することができた。こうした実績を踏まえ，インストラクショナルデザインの視点を引き続き重視して，授業の「効果・効率・魅力」を高めるための工夫を図ることが，ひいては本校生徒のオーダーメイドの授業につながると考える。また，生涯にわたって自ら学び続ける姿勢を身に付けていくことも今後の重要な視点であることから，生徒が自ら学びのオーナーシップを持つように支援していくことが大切である。これらの視点を重視し，研究実践について検証を重ね，校内では，教科等を超えた授業改善を図るとともに，校外では，研究会等を通じて情報を発信するなど研究成果の普及に努めたいと考え，研究主題を設定した。

(3) 研究体制



(4) 1年目の主な取組

平成 30 年度	4月	職員への研究内容共有, 年間指導計画, グラフィックシラバス, 評価規準等の作成, 自立度チェックの実施 (授業開始時, 各学期末考査, 計4回)
	5月	職員研修の企画・検討 (6月, 8月, 10月)
	6月	「深い学び」につながる考査問題の工夫及び実施 (各学期末考査計3回)
	7月	ホームプロジェクトの実施 (7・8月, 12月), 熊本大学鈴木克明教授によるID理解のための職員対象IDカフェ (7月, 11月)
	8月	鹿児島県高等学校実践研究会において実践発表
	9月	ポスターツアー実施の工夫 (9月, 2月), 授業改善のための見せどころシート検討 日本教育工学会第34回全国大会見学
	10月	熊本県高等学校家庭科主任会において実践報告
	11月	横浜国立大学岡嶋克典教授を招いて「五感を科学するプロジェクト」実施
	12月	教育課程研究指定校事業研究授業実施 (担当教育課程調査官指導訪問)
	1月	報告等の資料作成に向けた担当指導主事との打ち合わせ
	2月	研究成果の検証と次年度への改善策の検討, 学校ホームページへの情報掲載 国立教育政策研究所研究協議会において報告

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①評価の設計

- ア 診断的評価: 自作の「8段階自立度チェック」や「被服チェック」の活用
- イ 形成的評価: ICEモデルの視点を取り入れたチェックリスト・リフレクションシート
- ウ 総括的評価: ICEモデルを用いた「深い学び」につながる考査問題等の検討
- エ 自己評価・相互評価: ホームプロジェクトおよびKPポスターツアーでの活用
- オ グラフィックシラバス: テキストシラバスの図示化
- カ 小・中・高高等学校の連携を意識した8段階の自立度チェック: マークシート形式とeラーニング形式

②授業方法の設計・学習意欲を高める工夫

- ア ホームプロジェクト: 2回目はシングルポイントループリックを活用
- イ ジグソー法を活用した授業: 振り返り記述時間の確保
- ウ KPポスターツアー: サンプル作品の展示
- エ eラーニング: 事前課題のクイズ
- オ 思考を意識した実習計画表: プログラミング的思考を意識した手順・段取りの見直し
- カ ICEモデルの観点で作成したチェックリスト: 他教科等でも様式の共通化
- キ 学び方を支援する

③実践的・体験的な学習活動の工夫

- ア 防災を意識した取組
- イ 異文化を意識した調理実習
- ウ 五感を科学するプロジェクト
- エ 味覚を意識する実験
- オ 和服・和室の学習

(2) 具体的な研究活動

①評価の設計

- ア 診断的評価: 自作の「8段階自立度チェック」や「被服チェック」の活用
取組の最初に行う8段階のチェックの集計結果を授業の導入時に活用した。このことで、教師が重点的に説明する項目を精選することができた。また、この情報を考査問題作成でも取り入れ、理解が定着する機会とした。
- イ 形成的評価: ICEモデルの視点を取り入れたチェックリスト・リフレクションシート
様々な取組の最後に振り返りの時間を確保することを意識して授業を実施した。この振り返りで使用したリフレクションシートには、ICEモデルの視点で記述した記述文章を記載し、それをチェックリスト形式とした。
- ウ 総括的評価: 「ICEモデル」を用いた「深い学び」につながる考査問題等の検討
一昨年から継続して「Eレベル」(I: Ideas・知識, C: Connections・つながり, E: Extensions・発展)に相当する問題を作成し、各学期末考査で出題した。また、この視点の出題は大学入試改革の方向性とも合致していることから、職員研修でも提案し、教科を越えた作問を実施した。今年度は、授業当初実施の「8段階の自立度チェック」の結果を基に、定着していない項目から出題する工夫を行った。

エ 自己評価・相互評価：ホームプロジェクトおよびKPポスターツアーでの活用
それぞれの発表会において、自己作品の自己評価→発表時のグループ内での相互評価→その評価をもとにして再度自己評価（記述）→最後にグループでの回覧という手順で進め、記述内容の共有を図った。

オ グラフィックシラバス：テキストシラバスの図示化

授業開始時、生徒に小・中学校での家庭科における学びを図示させ、診断的評価の役割を持たせた。また教師が授業年度開始時に、文章で書いたテキストシラバスに加えて、授業の内容や概念を図式化した「グラフィックシラバス」を提示し、生徒が見通しをもって授業に臨めるようにした。年度の最後の授業には、生徒に1年間の学びを振り返って作成させ、総合的評価の一部とした。

カ 小・中・高等学校の連携を意識した8段階の自立度チェック：マークシート形式とeラーニング形式

今年度は高等学校段階の内容を数項目追加して実施した。1回目の実施はマークシート形式とし、各自のノートに貼付することでいつでも確認できるようにした。2回目以降はeラーニングを活用し、投稿形式とした。投稿後は自動で集計され平均値等が確認できるため、今年度はこのデータを授業へ反映させることにした。同じように、被服実習の前後にも同様のサンドイッチ形式を用い、実習前に実習項目で作成した「被服チェック」に取り組めるようにeラーニングで作成し、知識・技術の定着が低いところを重点的に指導するようにした。実習後にも同様の取組を行い、データの変化で定着や上達を可視化することができた。

②授業方法の設計・学習意欲を高める工夫

ア ホームプロジェクト：2回目はシングルポイントループブリックを活用

最初に、内容を充実させるためブレインライティングを実施した。また2回目の実施前に、1回目を振り返って一層高い内容へとつながる工夫とした。

イ ジグソー法を活用した授業：振り返りのための記述時間の確保

授業展開の工夫の一つとして、教科書を4人で分担し、グループで互いに説明し合ったり、教師が質問等をしたりする方法を取り入れた。生徒がグループ内で説明する際には、名刺大のカードを用意し、そこにキーワードを記入させるなどしてポイントを押さえた説明ができるようにした。このカードは、グループ説明終了後、ノートに貼り、振り返りのための記述をする際に活用できるようにした。今年度は、この記述時間を十分とるよう配慮した。

ウ KPポスターツアー：サンプル作品の展示

見通しをもって取り組めるようにするため、取り組む手順や内容が具体的にイメージできるように、昨年度のサンプル作品を展示した。

エ eラーニング：事前課題のクイズ

授業以外の知識定着の機会としてeラーニング形式のクイズを取り入れた。例えば、学校家庭クラブ活動で全校実施している「一品持ち寄り弁当の日」の事前活動として食中毒クイズを取り入れ、注意喚起を促すための学習ができた。

オ 思考を意識した実習計画表：プログラミング的思考を意識した手順・段取りの見直し

これまで使用していた自作の実習計画表は、授業前の事前課題として取り組んでいた。これを実習後、再度手順を振り返り、段取りを見直す取組を取り入れた。その際には、付箋紙を活用し、見直した手順が可視化できるようにした。

カ ICEモデルの観点で作成したチェックリスト：他教科等との様式の共有化

評価表をループブリックで作成する場合、3段階の記述語を作成することが一般的だが、これだと「このくらいでもいいのだという間違ったメッセージ」を与えてしまうことにつながる可能性があるため、そのようなことのないチェックリスト形式に整えた。また、こうした考え方は、他教科等とも共有化を図り、様式を揃えることができた。

キ 学び方の支援

「知識」レベルの作問から一歩進み、「思考」レベルの作問に取り組む等工夫した。

③実践的・体験的な学習活動の工夫

ア 防災を意識した取組：バスタオルで作る防災ずきん・熊本市東区食料品備蓄ガイド

バスタオルとハンドタオルを使い、手縫いで作る防災ずきんを家庭での課題とし、文化祭で展示した。また、中に縫い込む適切な材料を考える問題を考査問題として出題した。

地域の食生活改善推進員の協力を得て実施している調理実習では、市の栄養士から表記ガ

イドを使った講話をしていただき、考える機会とした。

イ 異文化を意識した調理実習

バングラデシュルーツのイギリス人ALTと協力し、献立を作成して実習に取り組んだ。

ウ 五感を科学するプロジェクト

横浜国立大学の岡嶋克典先生を招聘し、1学年全員対象の講演（食AR＜拡張現実＞体験を含む）と、学科の特徴を生かした学科別の3プログラム（美術科：色と錯視、理数科：視覚色彩工学、普通科：視覚の加齢とUD＜ユニバーサルデザイン＞）を実施した。

エ 味覚を意識する実験

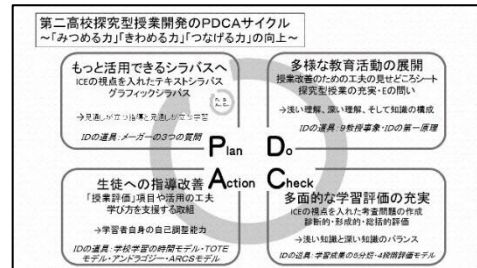
真空ミキサー活用し、味わい・香り・色等に違いがあることを体験する実験を行った。

オ 和服・和室

被服作品の出来上がりの個人差の時間を活用し、和服たたみの練習ができるように準備した。和室の入り方や畳の歩き方についての情報は、家庭科準備室の扉に資料を掲げ、入室の際に見ることができるようにした。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 自立度チェックや被服チェックを授業の内容に具体的に反映させることができたことは、生徒自身が自分の変化を感じ取る機会となり、授業のねらい・学びの過程・到達点などの見直しにつながる感じた。
- ICEモデルの視点で作成したチェックリストの書式について、総合的な学習の時間や講演会等で活用してもらうなど共有できたことはよかった。生徒の学習のしやすさにつながるよう、教員間での共有の機会を広げていきたい。
- グラフィックシラバスを参考に、本校の授業改善に関するPCDAサイクルを図示すると右図のようになっている。C/Eの考査問題の作成についても位置付けられており、それぞれの取組を教科会で深めていく形で今年度は進めているところであり、今後とも継続し、質的な向上につなげていきたい。
- ホームプロジェクトへの取り掛かりやすさを図るため、ブレインライティングを取り入れた。また、2回目の実施前には、思考を深めるための工夫としてシングルポイントルーブリックを取り入れ、有効であった。一人一人の内容が一層充実したものになるよう工夫をしていきたい。
- KPポスターだけでなく、調理実習記録の記入例や様々な課題の記述例など、生徒が取り組み始める際にサンプルがあることは学習しやすさにつながった。
- ジグソー法を活用した授業では、振り返り記述の時間を十分にとることができた。この時間を充実させることは知識の整理・定着に大きな意味を持つと感じている。
- eラーニングでの事前課題は、内容がクイズで手軽に取り組めたことが投稿数を増やすことに効果があった。楽しく取り組めたという生徒のコメントも聞かれた。
- 一方で、eラーニングの投稿というスタイルについては、生徒の実態を踏まえるとともに、個人情報にも細心の注意を払い、扱う題材について検討していきたい。
- 実習後、付箋紙を活用して実習計画表を再思考する機会を設定したことは、思考を一層深め、能率のよい手順・段取りにつながる時間となった。
- チェックリストの記述表現を、より分かりやすいように改善していきたい。
- 防災についての意識を高めるとともに、熊本地震の被災体験を風化させないように、防災ずきんを家庭での課題としている。今後もこの取組は継続していきたい。
- 調理実習を通じて、ALTとの交流の機会を持つことができた。
- 大学の先生方に御協力いただいたことで、学び方を支援する視点や、認知科学、色彩工学などの視点を踏まえた新たな教材の開発につながる事ができた。



4 今後の取組

年1回全校で取り組む「一品持ち寄り弁当の日」の振り返りとして文化祭で音楽付プレゼンテーションを上映しているが、ARマーカーの写真を読み込むことで動画をARとして見る事ができるアプリを使い、この振り返り動画が見られる取組を実施した。これをグラフィックシラバスに応用し、図が動くことで授業のスケジュール感が表現できるのではないかと考えている。まずは動画をプレゼン形式にすることを実践したい。